ニュースレター
熊本乃地名
発行者　熊本地名研究会
会長　木﨑康弘
題字　松野国策 書

山で生きる知恵の塊

焼畑のある暮らし　村を守ったダンナ制

五木郷土研究会
木野氏が講演


講演する木野氏

熊本地名研究会の7月例会は26日午後1時30分からパレア会議室で開き、五木郷土研究会の木野徹也氏が「焼畑のある暮らし」と題して講演した。木野氏の講演は一昨年3月に続き2回目。前回は焼畑復活に取り組む五木村の活動を中心にした内容だったが、今回は山村の暮らしや歴史にまで踏み込んだ聞き応えのある内容となった。「山村とは」から始まり、五木で「コバ」と呼ばれる焼畑の特徴、さらに五木独特の仕組みである「ダンナ制度」について説明した。その上で、「焼畑は本当に農業と呼べるのか」という視点から現代における可能性について、私見を交えながら話した。この日の例会出席者は13人だった。以下は木野氏の講演の要旨。（報告者・藤野）

畑ではなく山全体を利用

五木村は集落の多くが山腹にあり、古くから山とともに暮らしてきた地域だ。その中で育まれた代表的な文化が「コバ」と呼ばれる焼畑。今日は、この焼畑がどのような仕組みで成り立ち、人々の暮らしや自然とどのように関わってきたのかを紹介したい。

「山村」といっても大きく二つのタイプに分けられる。一つは、江戸や大阪といった大きな消費地に近い山村。こうした地域では、商人が林業経営に関わり早くから木炭や木材を商品として生産した。もう一つは、大消費地から遠く離れた山村。人々は食べ物、燃料や道具の材料、衣類の原料まで、塩と金属を除いたすべてを山から得る地域完結型の生活を行ってきた。焼畑が多く行われていたのは、熊本県では五木村や五家荘、宮崎県では椎葉村や諸塚村など九州山地を中心とした地域。これらはいずれも急峻な山々に囲まれた地域だ。だが、1950年の焼畑の図を見ると、意外と都市の近くまで焼畑が行われていたことがわかる。しかし、戦後の急速な社会変化でそうした焼畑はすぐに消えてしまった。

焼畑と聞くと、「山の木を切って燃やし、自然を壊す農業」というイメージがあるかもしれない。また、山村の暮らしは「貧しく苦しい生活だ」と思われがちだが、実際には違う。村では、食べ物を確保するためのさまざまな知恵があった。焼畑だけでなく、狩猟によって獣を得ることもできるし、山菜や木の実も豊富だ。そのため、飢饉が起きても比較的食料を確保しやすく、実際に五木では飢饉の際に食料を確保したことが評価され、役所から表彰されたという記録も残っている。また、水田地帯で食料不足になると、人々が山へ食べ物を求めてやって来たという話も伝わっている。

五木のコバは自然破壊のイメージとは全く違う。木を燃やして終わりではなく、そこから何十年にもわたって山全体を利用し続ける。コバの始まりは火入れで大体、梅雨明けの今頃の時期だ。木を伐採し、乾燥させた後に火を入れると、その灰が天然の肥料になる。一年目は麦やソバを栽培する。五木では主食は麦であった。二年目にはアワやヒエなどの雑穀を栽培する。山奥ではこれが主食だった。三年目は小豆や大豆、大根など。四、五年目はイモ類が多くなる。

コバの特徴は、作物を収穫した後も利用し続ける。草が生え始めるいわゆるアラシと呼ばれる期間には、クズやイタドリ、ワラビ、ゼンマイなどの山菜が採れる。やがて木が育ち始めると、タラノメなども採れ、イノシシやウサギなどの野生動物が集まり、狩猟の場にもなる。そして森林が成長すると、木材や薪、椿油、肥料となる落ち葉など、人々の暮らしに必要なさまざまな資源が得られるようになる。人々は畑だけではなく、山が回復していく過程そのものを暮らしの中に取り込んでいった。

五木のダンナ制度

次に、五木村独自の仕組みだった「ダンナ制度」について。焼畑を続けるためには、人と人との関係もとても大切だった。五木の集落では、大きく三つの立場の人々がいた。一つ目が「ダンナ」で、二つ目が「農家」、そして三つ目が「ナゴ」と呼ばれる人たち。ダンナは、一言で言えば集落を代表する家だ。集落の土地の大部分を所有し、

（2ページに続く）

地名研究会　告知板

＊地名研ブログでも活動や関連ニュースを発信中

9月 行事日程

✥例会「人吉城の地下遺構について」
郷土史家・益田敬三氏
9月20日（日）午後1時30分～
パレア会議室9

✥勉強会　テキスト「地名の研究」
（柳田國男著）
9月12日（土）午後1時30分～
パレア会議室5